

## 曲目解説

クリスティアン ヴァッハ (1735—82) は、彼の大ヴァッハの末子で、「ミラノのヴァッハ」「ロンドンのヴァッハ」と称されている。1764年にロンドンを訪れたモーツァルトが教えを受けたのは彼である。いわゆるギャラント様式の代表的作曲家である。

グリーク (1843—1907) は、劇作家イプセンの依頼によって、1876年《ペール＝ギュント》に付随音楽を作曲した。後に1888年、91年になって《第1組曲》《第2組曲》として改作している。当時は彼が創作に専念するため、生地ベルゲンに戻って住むようになった頃で、デンマークの作曲家ラークとの交誼から国民音楽創造のために民謡の系統的研究に着手した頃でもあった。彼の作風は、強烈な北欧的郷愁を内に秘めた牧歌性と、時折表れる甘美なまでの旋律に集約されるだろう。

ブラームス (1833—97) は、《交響曲第2番》を1877年、44歳の時に作曲した。今、私の手元に、彼が43歳のときの写真があるが、鬱陶しい程の髭は未だなくビール腹にも程遠く、そこにはハンサムなインテリが写っている。ブラームスの気難しさは有名であるがこの写真からは、彼の心の中の複雑な様子は伝わってこない。《交響曲第2番》を作曲したこの頃、ブラームスはやっと生活の安定を得た時期でもあった。

《ドイツクワイエム》(1868年作曲)の成功とともに彼はいわゆる名士となり、また経済的にも安定して音楽を教授することやソロ演奏のために時間を割かなくても済むようになる。彼は創作活動に重点をおいて、つまらないこと(ケンブリッジ大学からの博士号授与の招聘等)には一切耳を貸さなくなるのである。つまらないことというのは彼の思考の範囲内での判断であり、その頑なさには後に気難しいブラームス像を作り出す因があったようである。ブラームスの創作スケジュールは、初夏から初冬にかけて避暑地で主な作曲活動をするのが中心になっていて、秋から翌春の期間は、創作した楽曲のための演奏旅行などに費やされた。現在のユーミンの音楽活動に酷似している。一般的に18世紀までは、創作活動と演奏活動は逆であったが、鉄道機関の発達にもなって時期が入れ替わり、加えて活動の半径も飛躍的に拡大したのである。

1875年に彼は、それまで勤めてきたヴィーン楽友協会の芸術監督をも辞任して完全に創作活動に打ち込むようになる。といっても、協会の幹事となってプログラム編成の決定権を共有し、付属音楽院教授の任命権を有し、新人音楽家を育成する委員会委員となって、名士ぶりを発揮していた。かのドヴォルザークは、ブラームスが最初に推薦した有望音楽家の一人であったのだ。

ともかく、彼は前年の《交響曲第1番》に続いて《第2番》を作曲した。姉妹作品との論評もあり、ブラームスの『田園』という呼び方をすることもある。作曲地ペルチャッハの風光明媚な情景を描写しているようで、多分に牧歌的な雰囲気盛り込まれているからでもある。ビルロートは、この曲を聴いて「ペルチャッハとはどんなに美しいところなのだろう。」と語っている。実際にペルチャッハは、アルプスに囲まれたヴェルター湖畔にある美しい村である。が、実際の美しさ以上にブラームスがいかに楽しく彼の地で過ごしたかがこの曲には映しだされている。曲は第1楽章の冒頭に弦楽器で示されているドーシード(ニ長調)の基本モチーフで、全楽章が統一されている。3音の基本モチーフで全楽章を統一するというのは、ブラームスにとっては珍しいことである。第3楽章は、特筆される。ロンド形式に拠っていて、しかも変奏曲の態を取り入れている。H.リヒターの指揮によってヴィーンで初演された時にもこの第3楽章がアンコールされている。

(藤井部 勉・ふじいべ べん)